

月曜寸言

ソ連科学アカデミーの招待でモスクワに来て数日が過ぎた。冬のモスクワへは約一年ぶり。今夜は零下二十度の寒さだが、

夜十一時までクレムリン大会堂でクリンカ作のオペラ「イワン・スサーニン」を観ていた

ためか、寒さのことはすっかり忘れていた。ポリシヨイ劇団が演ずるこのオペラはポーランドのモスクワ侵略を打ち砕く幾国劇で、舞台装置も大変豪華なものだったし、主役のレシエーチンのバリトン、息子役のグリゴ

リエヴァのソプラノも素晴らしいが、ポーランド貴族をクレムリンの広場でやっつけるエピソードの場面などを見ていて、

ポーランド人が観たらやはりいい気持ちはいないだろうと思わずにはおれなかった。ポーランド

のオペラで教えられてもどうも野も有名である。そしてオペラは、そのような感じをありのままに表現しているのだが大部分がロシア人である観客は、ロシア兵の勝利を手を打って喜ぶ反面、ポーランドの貴族や兵士の華麗な姿を羨や

ドといえは、史上に有名な三たびにわたる「ポーランド分割」で知られるように、ロシアの方こそ侵略者であって、ポーランドはいつも制圧されてばかりい

敵・ポーランドの貴族たちの宮殿での踊り(第二幕)が実に美しく上品で律動的であって、観

客もうっとりしていたし、兵士たちもロシア兵が粗野で荒々しいのにポーランド兵の方がいかにもスマートなことであった。

このように風潮は、たんにオペラの場面に過ぎらず、ソ連社会の全体をいまやおおいはじめているように思う。そして、ソ連自身のかなりの部分がたとえは日本の社会的先進性に向

モスクワのオペラ

中島 信雄

す。ソ連の立ちおくれ、日本社会の能率にたいする自国の非能率を自覚しはじめている。こうした自覚をテコにしてはじめて、今夜のオペラに見られたようなソ連芸術の素晴らしい達成とソ連の社会生活における非能率、鈍感、官僚性など、ソ連芸術にみられる繊細な感受性からすればまったく信じられないほどのギャップが徐々に埋められてゆくのかも知れない。

ソ連は、そのようなギャップが埋められたときはじめて世界の先進国に堂々と仲間入りすることができるとも思う。

(モスクワにて、二月十二日 記、東外大助教)

月曜寸言 モスクワのオペラ 月曜評論-1976.03.08